

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	4
瑠璃集	6
瑪瑙集	13
紅玉集	14
光耀抄月評	15
琥珀集作品鑑賞	18
瑠璃集作品鑑賞 I	19
II	20
瑠璃集紅玉集作品鑑賞	21
西教寺吟行記	22
総合誌の窓	24
薪御能について	26
「環」の語意に誘われて	28

夏蝶の息づく瑠璃や楓の葉 水原秋桜子

「隠れ蓑」という名をもつ楓に止まる蝶を見て詠まれた句である。その見事な若葉の美しさに打たれている師の前に、瑠璃揚羽が息づいていた。その息づくごとに翼が瑠璃色に輝いていたという。下五音を「楓の葉」ととめてあるところは「こうすると感じの新鮮さが一番よく現われるように思った」というのが秋桜子の一言葉である。

塩路 隆子

桃の日

塩路隆子

花菜漬買って若狭の箸おろす
桃色の村となりけり桃咲いて
からころと外湯めぐりや戻り寒
をさな児の夢の千里や黄風船
桃の日やぼつり小さき嬰の乳
国宝の塔より高き帰雁かな
椿落つ別れの美学貫きて
跳べさうで跳べぬ野の川猫柳

光耀抄五月号

塩路 隆子選

その昔祖父の座にあり春火鉢
紅梅の匂ひま近に童子仏

里坊の門川はやし雪解どき

品格を問はれし世相寒厳し

嬰の顔に無聊癒さる冬籠

春を呼ぶ伊勢のでんでん太鼓かな

楊貴妃の艶めく春の刺繍服

しづり雪不断念仏躰きぬ

湖望み二十五菩薩春奏づ

春愁や亡夫の書籍捨て難く

カプチーノに溶けゆく春の愁ひかな

甥の代となりたる生家雛飾る

温泉を守る地蔵に小さき鏡餅

キュートなる湯たんぽを買ふ乙女かな

伊東 和子

岡 佳代子

片岡久美子

桂 敦子

馳井 のぶ

塩路 五郎

田下 宮子

田中 芳夫

長濱 順子

能勢 栄子

藤見佳楠子

光野 貞子

栗倉 昌子

伊藤 洋子

鉄瓶の音の紛るる雪起し

雪見酒話のつきぬ出湯の宿

あれこれと掛け合ふ夫婦植木市

春浅し飛驒の匠の和蠟燭

氷解けいよよ方舟造らねば

色紙替へ心静かに春を待つ

荒々し春一番の愚連隊

江ノ電の竜宮駅舎春日差

障害の厚き玻璃戸や恋の猫

帰宅路の空寒々と二日月

ひとり子の声朗々と「鬼は外」

積もる雪景色も音も包み込む

七色のはしゃぐ声載せ石鱗玉

ひなまつり一年ぶりに会えました

ドッチボール負けたり勝ったり花いっぱい

春の虫飛んだりはねたりかくれんぼ

笹田 浩朗

奥田かおり

奥村佐栄子

田中 浅子

新実 貞子

西垣 順子

宮崎左智子

松田 和子

宮田 香

山口キミコ

山本 孝夫

横田 矩子

和田 郁子

広瀬 結麻

塩路 彩人

塩路 翔

琥珀集



春火鉢

伊東 和子

赤き箱抱へてバレンタインデー
紅梅をしかと点じて今朝の庭
送る子の肩へ淡雪夕灯
その昔祖父の座にあり春火鉢
紅生姜忘れず買うて雛の寿司
糰や異国風情と思ひつつ
靴はづむ天地の息吹き春だもの

春の雪

池田加寿子

童子仏

岡 佳代子

熱爛に盛り上りけり幼どち
山茶花の家にさし込む月あかり
竹生島より望む伊吹山や冬ざるる
風荒き湖国暮しや鮎煮る
幻想的メタセコイアの雪の道
傘赤き舞妓の肩へ春の雪
透きとおる疏水の流れ梅香り

紅梅の匂ひま近かに童子仏
海坂にゆらぐ白帆や花菜風
罅走る露座の大仏凍戻る
加湿器の湯気やはらかや梅日和
若きらの献血の列あたたかき
衿立てて急ぐ家路や余寒なほ
白梅の可憐に開花女学生

木彫雛

小林 成子

掌にのせて扱ぶや古都の木彫雛
 雛積みし舟の行方に黄泉の国
 雛の間の灯り灰かや更けぬたる
 探梅の人のやさしき里訛
 梅見坂見上ぐる空の紺深き
 野梅咲く月瀬の溪のとのぐもり
 梅林を去るも匂へり月瀬径

春の虹

塩路 五郎

探梅へまづは小用済ましけり
 水車小屋に水の匂ひの露の臺
 春一番の煽る繁昌亭のピラ
 デカルトもカントも知らず山笑ふ
 リビングに植物図鑑春の風
 春を呼ぶ伊勢のでんでん太鼓かな
 消えてゆくもの美しや春の虹

木の芽風

坂上 香菜

春風や逸翁館に蕪村軸（小林二三）
 盆に咲く甲州野梅古色なる（旧竹林院）
 まほらなる観音の里梅薫り
 巢より鶺鴒啼きて吾が子を引き戻す
 蝶生るるごとき芽吹きや高野槇
 熊啄木鳥の叩くひびきや木の芽風
 湖望む土手に蒲公英点りけり

帰宅拒否

鈴木 照子

公園に帰宅拒否の子春夕焼
 ニューヒロインの爆走ロード風光る（名古屋国際マラソン）
 復活の赤福餅や水温み
 凝らす目に春雪の富士空に溶け
 新設の口笛講座地虫出づ
 発進のジェット機雲や山笑ひ
 うららなるハンドエステや美容院

瑠璃集

垂り雪

里坊の門川はやし雪解どき
湖おぼろ地藏千体畑中に
残る雪武将の妻の墓小さく
光秀の墓標を伝ふ垂り雪
春浅き石堀めぐる水はやき

寒厳し

「友だち」と子の書初や正座して
初耀の魚にも異変温暖化
品格を問はれし世相寒厳し
盆梅の香気にしばし佇みぬ
雪山を飛翔の小鳥尾羽を振り

片岡久美子

桂 敦子

臙夜

ぶらんこにピアス光らせ若きパパ
阿蘇連山まるで寝釈迦よ揚雲雀
湯煙の由布院臙夜となりぬ
受験子へ程よき濃さの緑茶かな
天神に野点の席や梅日和

紀川 和子

犬ふぐり

千金の余生の浪費冬籠
マンシヨンは曾て雲雀野犬ふぐり
有難き護摩の温もり初大師
冬銀河櫂並木のファンタジー
篆刻の手許に届く春日かな

北尾 章郎

冬籠

春雪を蹴りつつ楽しポストまで
冬籠り今日は俳誌を友とせむ
手造りの木目込み雛を飾りけり
急霰に吟行予定反故にせる
嬰の顔に無聊癒さる冬籠

駒井 のぶ

光耀抄月評

塩路 隆子

その昔祖父の座にあり春火鉢

伊東 和子

遠い記憶のなかの一光景であろう。その火鉢は陶器であらうか、箱火鉢であらうか。火鉢の暖かさが伝わる。幼い頃に思いを馳せると、何時も決まった場所に坐っているお祖父ちゃんの姿、お祖母ちゃんとは少し違ったおじいちゃんの厳しさも連想に浮び、そこに置かれていた春の火鉢が鮮明に蘇って来るといふ。

「春ストーブ」「春炬燵」いいえ春火鉢だから作者は余計に強い郷愁を感じられたのではないだろうか。

温泉を守る地蔵に小さき鏡餅

粟倉 昌子

作者は旅吟を得意とされる方である。九州へ旅をされた連作の中の一句である。九州には良い温泉が沢山あり、お正月をこれらの温泉で過ごす人も昨今増えているようである。ここ湯元ではお地蔵さんが温泉を守っている様子。お湯を大事にする土地の人たちの心の表れとも言え

る小さな鏡餅がお供えしてあるという。お湯の温かさだけでなく人の心までが伝わる暖かい句である。

品格を問はれし世相寒厳し

桂 敦子

「国の品格」から始まって「女性」や「親」「子」の品格まで、何処まで行けば気が済むのか思うほど次々と書籍が出版されその品格を問われている世の中である。それをいま言わなければならぬと言ふことこそ問題にしないといけないのではないだろうか。作者のご意思はつきりと「寒厳し」の季語に表れている。現代の世相を反映している厳しい俳句として評価したい。

カプチーノに溶けゆく春の愁ひかな

藤見佳楠子

カプチーノとは、極く細かく挽いた深妙りのコーヒー豆に圧搾蒸気を通し一気に入れた濃いエスプレッソコーヒーに、蒸気で温めて泡立てた牛乳を加えたものを言う。カップに盛り上がったふわふわの泡のまろやかさと、この効いたコーヒーを混ぜて味わうと、マニアにとってはたまらないひとときを過ごせるにちがいない。と曖昧な表現を以って言うのも生来、体質的にコーヒーが合わないらしく好んで紅茶を味わうことにしている。